

卐



RYO KANZYU, 卐 Pride and Dust World

月で逢いましょう(1/1)

ふたりの老人がいた。

若い頃、ふたりは東へ上った。

コンビで仕事を始めた。

いくつかの大切な物を失くしながら、苦勞と喜びを経て成功したふたり。

長い間、ふたりは世界を駆け回っていた。

けれど、ある時、突然別れてしまう。

その頃の二人は、「人生の答え」を考え始めていた。

話し合いの結果、ケンカ別れではなく、前向きな別れとなった。

それから時間の河は万里を越えるように流れた。

離れたまま遠くどこかに運ばれたふたりは、再会することなく人生を終えようとしていた。

それまでの道程とは違うひとりで歩く道程は、共に順調だった。

多くの慈善事業に関わり、世界に印象的な足跡も残した。

時には数字に苦しめられながらも、それぞれの最前線に立った。

そして、さらに働き続けたふたりは、再び夢を抱いた。

どうしたって夢を見てしまうという現実。

ふたりの羅針盤は、年老いても輝いていた。

人生の終章のどこかで、大きな旗が掲げられようとしていた。

「月へ行きたい」

同じ夢だった。

ふたりは持っている全てを、惜しみなく投入した。

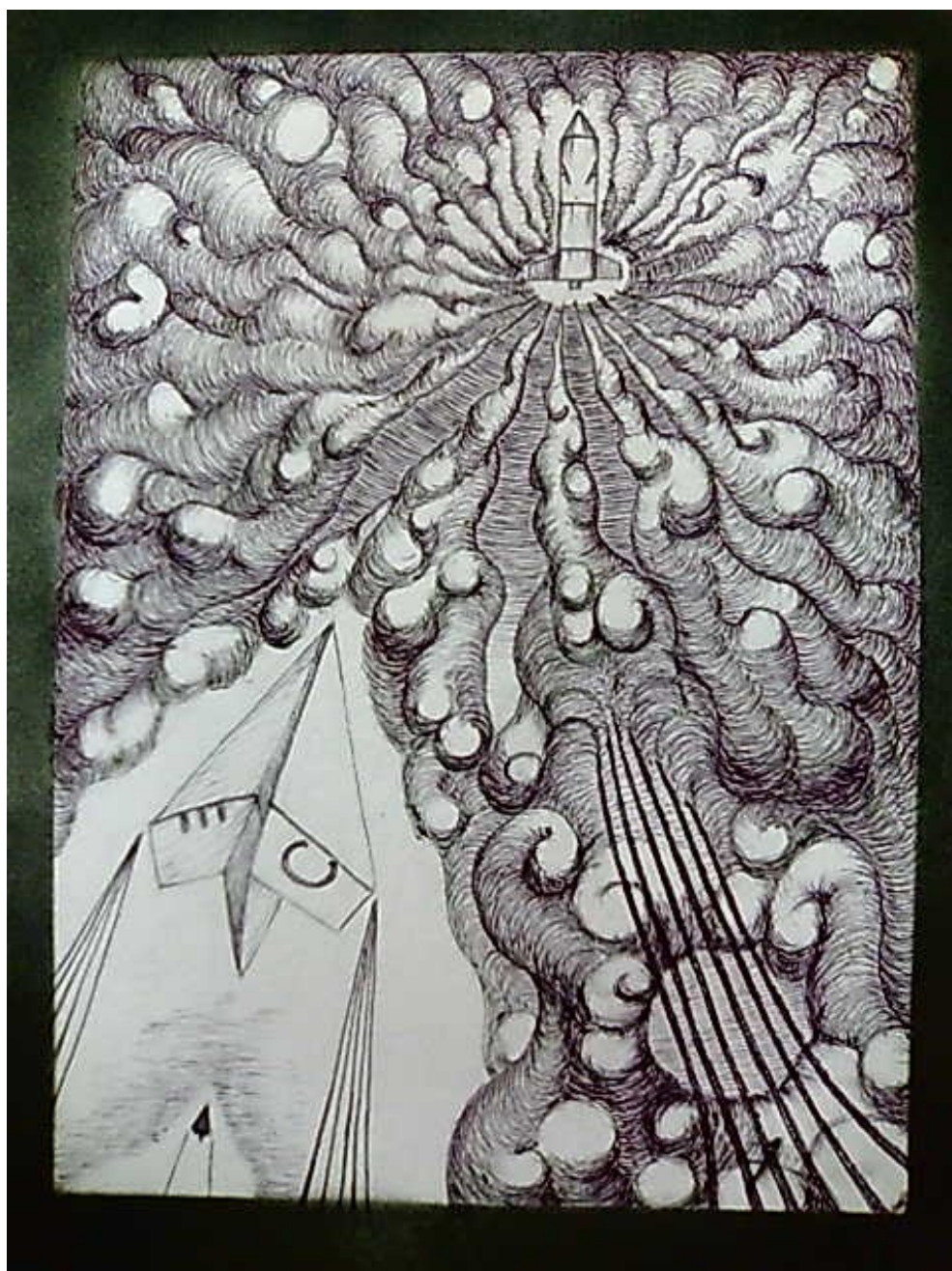
月へ行くための乗り物が建造開始。

それは世間に公にされることなく、大切な花を育てるように進められた。

ふたりにとっての史上最大の作戦は、真昼の月も知らない。

夜の月にも秘密。

そして、お互いの所在を知らないまま、ふたりの夢は開演に近づいた。



あれから30年余り。

ふたりは、それぞれの部屋で、ベッドの上。

年老いて、両足は疲れてしまった。

長い旅の途中にあった出来事を、たくさん忘れてしまった。

お互いのことですら。

そんなある日の夜、ふたりは月を見上げていた。

ひとりには、月が近づいたみたいに大きく見えた。

もうひとりには、月が何か言っているように見えた。

「なぜ月へ行かなければならないのだろう」

月明かりの下、ふたりは記憶の中をかき分けながら、ひとつだけ思い出した。

月の力で深い底から引き上げられたようなひとつ。

埃にまみれてはいたが、鼓動を感じた。

それは、いつかの約束。

別れるずっと前のこと。

ふたりの夢は、月へ行くことではなかった。

ふたりの交わした約束は、月のステージに立つこと。

それは、またふたり並んで歌うこと。

そんな約束を思い出しながら、ふたりは一緒にまぶたを閉じた。 ～終わり